

大学の世界展開力強化事業（平成23年度採択）事後評価結果表

大 学 名	○名古屋大学、東北大学
整理番号	A-I-6
事 業 名	持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点の形成

◇大学の世界展開力強化事業プログラム委員会における評価

(総括評価) A	取組状況、目標の達成状況ともに事業計画を概ね満たしており、事業目的は実現された。
(コメント)	<p>交流プログラムの枠組みについては、日中韓3カ国におけるトップクラスの6大学の化学系学部がそれぞれの強みのある分野を持ち寄った、大学院学生を中心に相互派遣する意欲的なプログラムである。</p> <p>質の保証を伴った、魅力的な大学間交流の枠組み形成については、特に単位の相互認定に関しては、派遣先の大学の教務体制に合わせて単位を取得し、派遣元大学が内容を確認して単位認定を行う方式で、相互の信頼関係の下行われていた。英語の堪能なキャンパスアジア専任の外国人教員や事務職員などを採用しており、教育体制の充実も図られた。学生の英語力については、当初設定していたTOEFLやTOEICの基準が使われておらず、受験者が少なかったようで一層の工夫が必要である。</p> <p>外国人学生の受入の環境整備については、英語で支援できる体制が整っており、全員にマンツーマンのTAや奨学金が提供されており良い体制であったと言える。日本人学生の派遣のための環境整備についても、渡航費、宿舎、奨学金が充分提供された。生じた問題は、国際コーディネーターが対応し解決された。しかしながら、短期留学が多く、産業界との連携は活発ではなかった点に関しては改善の余地がある。</p> <p>情報の公開、成果の普及については、東工大や他のプログラムで関わりのある大学との学生交流や成果の共有が見られた。成果の公開については、公開シンポジウムやホームページにより、一般的な方法ではあるが実施された。</p> <p>目標の達成状況については、受入学生数、派遣学生数、セミナー、シンポジウムに関して目標は概ね達成されたが、今後はより客観的に外国語能力の向上を把握し、事業の改善につながる工夫も必要である。受入学生数は目標値を大きく上回っているが、本事業のみでの達成がどの程度だったかは明確でない。</p> <p>本事業はそれぞれの大学の化学における強みを活かし、教員の共同研究と大学院生の相互派遣をうまく合わせたプログラムとして、先駆的なモデルになったものと思われる。今後の展開としては計画の水準がやや抑制的なため一層の事業展開を図り、学生の底上げにも留意することが望まれる。</p>